

ホロノギを知っていますか 滝川康治(札幌)



四月初め、私にとっては初めての著書『幌延(ほろのべ)——核のゴミ捨て場を拒否する』を、「技術と人間社」から発行した。

この本は、八〇年代初めから昨年暮れまでの間に起きた、北海道での、核のゴミ、拒否運動の歩みを中心にまとめている。動力炉・核燃料開発事業団(動燃)が道北の酪農のマチ・幌延に立地を計画している高レベル核廃棄物施設(貯蔵工学センター)問題は、電力業界が進めている下北計画ほど多くの人に知られていないが、実はここ七年ほど北海道全体を大きく揺り動かしてきた。

「過疎脱却」を旗印に施設誘致を進めようとする田舎の町と、「原発のトイレづくり」を焦る原子力推進側の利害が一致して、立地計画を強行しようとしたのだったが、広範な反対運動によって現時点では立地断念寸前のところまで追いつめられている。

世論を受けて道知事が反対の立場を鮮明にしているのに加え、昨年七月には道議会も「立地反対決議」を可決。隣の豊富町議会では、「立地促進決議」が昨年六月にいったん可決されたものの、住民パワーによって決議強行の立役者となった町議会議長らを取りこぼし、この三月には逆に「反対決議」を可決

してしまっただ。

私が原子力問題について真剣に、にわか勉強を始めたのは、今から十年ほど前、生まれ故郷の町の鉱山廃坑を利用して、動燃が高レベル核廃棄物に関する原位置試験を準備している、という新聞記事に接してからである。

その頃は川崎市内に住んでおり、少しばかり反公害運動にも参加していた経験もあって、もちろん危険な原発には反対だったが、まだまだ自分自身に引きつけて考えてみる努力を怠っていた。

いずれは北海道に戻って生活しようと考えていた私は、動燃の原位置試験の成りゆきが気がかりでもあり、ちょうど十年間の都会暮らしにピリオドを打って八二年に帰郷した。

落ち着く間もなく飛び込んだのが、幌延町が低レベル核廃棄物施設の誘致運動を進めている、という新聞記事。その後、「低」から「高」へとすり替わった核施設誘致計画だったが、私は地方紙記者の仕事しながら、市民グループの一員として機会あるごとに幌延とその周辺を訪れるようになった。

「幌延」をめぐる現地や周辺町村の反対運動の中では、署名集めや集会、学

習会、デモといったオーソドックスな手法はもちろん、酪農民による消費者アンケート、トラクターデモ、議員リコール、住民訴訟などといった創意工夫をこらした活動がくり広げられてきた。時には農作業や牛の世話の手を休め、ある時には猛吹雪の中を議会傍聴などに駆けつける周辺の酪農民らの姿に励まされながら、私は多くのことを学んだ。

著書の中では、こうした周辺酪農民らの取り組みや、それを包み込む市民運動の流れを軸にして、動燃の山口とそれに巻き込まれてしまった推進派議員の姿、地方蔑視で場当たり主義の原子力行政の実態を、私自身の体験も少し織り込みつつ紹介している。そして、岡山などでの、核のゴミ、拒否運動の営みや、推進側の描く廃棄物処分の見取り図と哀れな内実についても触れてみた。

本格的な跡始末時代を迎えて、今後ますます現実味を帯びてくると思われる「原発のトイレづくり」の問題を、幌延をめぐる経過や教訓を通じて、多くの人々と一緒に考えてみたい。いやおうなく原発社会に組み込まれた生活の陰で、過疎地に押しつけられようとする無謀な計画の内実を広く知ってほしい——この本に対する著者の思い入れは、そんなところにある。

まとまった物を書いてみるようになると、勤めてくれたのは室田武さんで、八九年春に水車づくりの市民グループの招きで名寄市へ講演に訪れた時のことで

ある。

その頃、私は両親の健康状態などもあって、とりあえず家業の酪農を引き継がざるをえなくなり、地元の新聞社を退職していた。核廃棄物問題について整理された本がないので何かとは思っていたが、実際に書き進めてみようと決めたのは、その年の秋口になってからだった。

北海道北部は、十一月下旬ころから約五カ月間、雪にすっぽり覆われる。朝夕の牛の世話と搾乳などのほかは作業がなくなり、自由な時間が取れる冬場を利用して、資料整理や取材、執筆作業を進めた。

自費出版するならともかく、いくら原稿を書いても出版してもらえないれば話にならない。室田さんにお願したら、「印税などの保証があるところを……」と、中堅のA社の編集長を紹介していただき、途中までの原稿を郵送して読んでもらったりする。

「現場の喜怒哀楽、息吹きが伝わってくる質の高い読み物」というのが、A社の編集長の持論。反原発の本を何点か出版しているのだが、「運動のパートナー」という立場の本づくりはできない。あなたの本は運動の中で少しずつ広めた方がいいのではないかと助言だった。

そこで今度は反原発新聞編集部の子尾漢さんに相談を持ちかけると、B社の編集者に原稿を回してくれた。B社の判断は、「原稿はいいのだが、営業面でどうか」。

結局、原稿は西尾さん経由で「技術

と人間社」に回り、出版の方向が固まったのは昨年の十一月初め、「印税分は現物(本)で著者に」という条件に落ち着く。

数年前の運動の高揚期とは違って、「原発物」が売れなくなった出版界の中で、本を発行することの難しさを肌で感じさせる一年間だった。

北海道新聞の社会面などで著書刊行の記事を載せてくれたりしたこともあって、出版後はうれしい反響が相次いだ。

一緒に活動してきた幌延や周辺の人たち、名寄の仲間などが、心から出版を喜んでくれたのが何よりうれしかった。新聞記者時代に知り合った思いがけない人から電話が掛かってきたり、「一冊送ってほしいと、札幌の息子から電話があったので……」と、わざわざ自宅まで買い求めに来てくれた人もいた。

「歴史的事実の資料としても、ノンフィクション文学としても読めます」と感想を寄せてくれた稚内の児童文学者加藤多一さん。旭川市内の書店の店長さんからは「直接あなたから本を預かり、販売してもいいですよ」という連絡もあった。

私の小学校時代の校長先生は、幌延の隣にある天塩町での教員歴がある人。「東京にいる詩人の友達に一冊送るから」と一冊買ってくれ、翌朝再び電話があり、「実は昨晚読んでみたら、私の知り合いや教え子が載っているの、ぜひもう一冊」と言ってくれた。

こうした反響は、道北に住む人々の「幌延問題」に対する関心の高さを物語っていると思う。

また、出版事情などを書いた手紙を添えて各地の仲間や友人、知人に本を贈ったところ、あちこちから五冊、十冊と声がかかり、岡山の「県条例を求める会」の石尾禎佑さんからは、「手分けして販売するので五十冊」との連絡が舞い込み、運動のつながりの大切



さをつくづく感ずる。

美唄消費者協会の伊藤みえ子さんからは、「現地や周辺を中心に書かれていたが、無名のたくさんの人々が全国にいます。そうした人々たちにも一言明記か何かの言葉がほしかった。いつの日にか裾野を広げて書いて下さい」という主旨の手紙をいただき、力量と時間不足から、都市部の生活者の取り組みを書き込めなかったことを反省させられました。

だが、うれしい反響があったとはいえず、核のゴミやそれを生み出す原発の問題に対する人々の関心は、一時

期のような高まりはない。

「技術と人間」四月号の編集後記に、社長の高橋昇さんが本の見本を手に取次店回りをした際に、「これ(幌延)は何と読むのですか?」と聞かれ、がっかりしたという話が載っていたが、多くの人々に伝え、脱原発の道と一緒に考えるのは時間のかかることだと思

う。

私は最近、諸事情から家業の酪農を整理して札幌市内に転居した。市民グループ主催の景山民夫講演会があると聞き、会場の書籍販売コーナーに著書を置かせてもらったが、売れたのは数冊。聴衆は五、六百人、さすがに景山さんの本は売れているが、「原発物」の売れゆきはパッとしない。草の根通信の「ずいひつ」によく載る松下センセの本の売れない嘆きが分かるような気がした。

そんな訳で、この本はA社の編集長が言っていたように、グループや個人の口コミ、ミニコミで広めていくのが最もいい方法のような気がする。読者の皆さんにもお願いします。

『幌延一核のゴミ捨て場を拒否する』

技術と人間 発行

定価 二〇六〇円(税込み)

文中に書きました事情で著者が抱え込んだ本を売らねばなりません。札幌市南区藤野2・5・88・10 滝川康治 電話 〇一・五九一・三六五八

『針穴からみたニッポン』

川原一之 著

本田企画 発行

一〇〇〇円

——著者「あとがき」より
今も付き合いのつづく土呂久公害事件と出会ったのは、記者三年目のときだった。その後、福岡を最後に新聞社を辞めて宮崎に戻り、土呂久の記録者兼支援者になってから十六年近く経つ。一九八八年の秋には被害者に同行して上京、都心には住友金属鉱山玄関前の五十六日間の抗議の座り込みに参加した。その現場に座っているとお金に狂ったニッポンの姿が実に鮮明に見えてきた。

振り返ると、これまでの人生の半分を、この地球の針の穴ほどに小さな辺境のむらと関わってきたことになる。「針穴から見たニッポン」にあつめたのは、土呂久の△関Vから見える世紀末のこの困のゆがんだ光景の数々だ。

岩波新書『亜硫酸ガス』で知られる川原さんのコラム、ルポルタージュを集めた新書版。

著者宛てに申し込んで下さい。
〒八八〇 宮崎市江東町10・14
毛利アパート 川原一之
電話〇九八五・二五・八二〇三
(その場合、送料二〇〇円)